

## リベリア都市部におけるドラッグ使用の素描

金 田 知 子

### A Brief Report on the Situation of Drug Use in an Urban City of Liberia

KANATA Tomoko

#### Abstract

This article reports on drug use in Monrovia, the capital city of Liberia. Liberia experienced a large-scale civil war between 1989 and 2003. Drugs such as cocaine, heroin and marijuana were commonly used during the war by combatants to make them fearless. Although the war came to an end, the drug use issue remains a serious social problem. It has been identified that there are 23 communities crowded with “ghettos” where drugs are sold throughout Monrovia. With an expanding and lucrative trade, drug users are increasing in numbers with abundant supplies. Liberia does not have any strict narcotics law; therefore, suspects arrested for drug crimes merely have to pay a small amount of money as fines in order to be released. A drug user who used to be a police officer said that many police officers were drug users themselves and some ran ghettos, using connections with drug dealers.

Semi-structured qualitative interviews were conducted with 56 drug users (41 males and 15 females) in two of the ghetto communities. The average age was 31 years old; the oldest was 52 years and the youngest was 16 years. Sixty-one percent of them were ex-combatants. Common jobs for male respondents were odd jobs such as water selling, car washing and drug pushing. Five answered stealing as their jobs. Seventy-three percent of women worked as prostitutes. All the respondents said that they wanted to abandon the cycle of drugs, but they could not as they had no access to medical support and social support to help them find a way out. Based on the social and structural circumstances they face such as lack of health care and rehabilitation systems, the dysfunction of the drug control system, corruption, stigmatization, social exclusion and poverty, it seems that they are obliged to take drugs in order to survive.

**キーワード：**ドラッグ、紛争、リベリア、アフリカ

**Key words:** Drug, War, Liberia, Africa

## 1. はじめに

西アフリカに位置するリベリア共和国では、1989年から2003年にかけて武力紛争が展開され、多数の一般市民が戦闘員によって虐殺されるなどの残虐行為が横行した。この間、250,000人以上もの命が失われ<sup>1)</sup>、およそ21,000人の子どもたちが兵士として戦ったとされている<sup>2)</sup>。こうした大規模な紛争が長期間にわたり展開された背景のひとつには、戦闘員たちの間で使用されたドラッグがある。紛争後にリベリアで実施されたある調査によると、回答者(1,666人)のうち約3分の1が紛争時に戦闘員であった経験をもち、そのなかで男性戦闘員の半数はドラッグを使用していたことが明らかになっている<sup>3)</sup>。紛争終結後、そうした戦闘員を対象とした「武装解除・動員解除・社会復帰・再統合(Disarmament, Demobilization, Rehabilitation, Reintegration: DDRR)」が大規模に実施され、リベリアの平和構築はいま確実に進展しつつあるようにみえる<sup>4)</sup>。

しかしその一方で、リベリアの首都モンロビアでは、住むところを持たずストリートで暮らすドラッグユーザー<sup>5)</sup>が顕在化している。彼らの多くは元戦闘員である。紛争中に家族を失い、残虐行為を繰り返していたために自分の村に帰ることもできず、使用し続けたドラッグを断つこともできずにいる。男性は、物乞い、洗車、鉄くず収集などの小遣い稼ぎで生計を立て、女性の多くは売春をしている。モンロビアでは、こうしたドラッグユーザーたちが集まる地域が少なくとも23か所あり<sup>6)</sup>、各地域には「ゲットー(ghetto)」と呼ばれるドラッグ売買が行われる場所が密集している。ゲットーへの強制捜査で、ドラッグユーザーに暴行を加える警察と、それに抗するドラッグユーザーとの間の騒ぎが暴動に発展することもあり、ドラッグ問題が深刻な社会問題としてマスメディアでしばしば取りあげられている。モンロビアでドラッグユーザーの支援を行うNGOを運営しているサムエル・ギブソン(Samuel Gibson)は、「紛争前は、ドラッグは一部の上層の人々の嗜好品だったが、今は社会全体に広がっている」<sup>7)</sup>とドラッグ使用の拡大に警鐘を鳴らす。

本小論では、文献とモンロビアのストリートで暮らすドラッグユーザーへのインタビュー調査を通して、現地のドラッグ使用の現状を明らかにする。尚、紙幅の関係上、今回はリベリアのドラッグをめぐる社会環境を概説した上で、インタビュー調査の結果の一部と事例のみを紹介するに留める。

## 2. ドラッグをめぐる社会環境

### (1) 使用されているドラッグ

ドラッグの定義は多様であるが、とりあえず本稿ではドラッグを「麻薬に関する単一条約」、「向精神薬に関する条約」、「麻薬及び向精神薬の不正取引の防止に関する国際連合条約」などの国際条約によって定められた違法薬物とする。

『世界ドラッグ報告書』によると、アフリカで使用されている主要ドラッグは、大麻、あへ

ん類、コカイン、アンフェタミン（覚せい剤）である<sup>8)</sup>。残念ながらドラッグ使用に関するリベリア個別のデータはないが、筆者が行ったインタビュー調査でも、インフォーマントたちが使用していると答えたのは主に大麻、ヘロイン、コカインであった。

大麻には、大麻草の若芽、花穂、葉を乾燥させたマリファナと、花穂や葉からとれる樹液を固めたハシッシュがある。モンロビア市内で多く使用されていたのは前者のマリファナで、「グラス」、「ガンジャ」、「オピウム」とも呼ばれていた。現地では紙で巻いて吸煙するのが一般的であるが、アタヤと呼ばれる玉芽茶（Gunpowder Tea）に混ぜて飲んだりもする。大麻草は繁殖力が強く、それゆえ栽培も容易で、リベリア国内ではボン州、ロファ州、ニンバ州などで不正に栽培が行われている。栽培に7年を要するゴムや3年を必要とするパームオイルに比べて3か月で収穫できる大麻は、栽培者にとっては効率的な現金収入となる<sup>9)</sup>。とはいえ、大麻の価格は1本分が10リベリアドル（12円）程度と非常に安価であり、モンロビア市内では、ゲットーのみならず、道端でマリファナをタバコのように吸煙している人を見かけることも少なくない。

あへん類のヘロインは、ドラッグのなかでも特に強力な身体依存性と精神依存性を形成し、鎮静作用と強い多幸感をもたらすとされる。「ドゥジー」、「イタリアンホワイト」、「ターホワイト」などがリベリアでのヘロインの呼称である。1回分が20リベリアドル（24円）程度で、その価格からも明かなように、現地で使用されているのはかなり純度の低いヘロインベースの混合物と推察される。モンロビアのゲットーでは、ヘロイン使用のために静脈注射が用いられることはほとんどなく、アルミホイルの上にヘロインの粉末を一直線に置き、下からロウソクなどで炙り、アルミホイルを丸めたストロー状の物でその煙を吸煙する方法がとられている。できるだけ煙を逃さないようにするために、ヘロイン使用時に頭から毛布を被る者もいるという。

コカインは、南米原産の植物コカの葉から作られるドラッグである。リベリアでは、コカインは「ココ」と呼ばれ、ごく少量のパックが5米ドル（400円）で売られている。モンロビアでは、マリファナと異なりコカインはオープンに使用されることはあまりなく、ゲットー内や人目のつかない場所で使用されることが多い。ゲットーでは、「ボンゴ」と呼ばれる、ペットボトルのキャップなどで作られたパイプを使ってコカインを摂取する。いわゆる「アッパー系」に分類されるコカインは興奮作用をもたらし、その向精神作用効用も強いいため、筆者がインタビューしたインフォーマントたちは、まずコカインを摂取して気分を高め、次に「ダウナー系」であるヘロインで落ち着かせる、という順序で使用していた。

上記のドラッグの他、ジアゼパム（現地商品名バリウム）という鎮静作用をもつ抗不安剤もドラッグとして用いられている。現地では「テンテン」、「バブル」と呼ばれ、5mgの錠剤が5～10リベリアドル（6～12円）で入手できる。紛争中、コカインが武装組織の上層部で広く用いられていたのに対して<sup>10)</sup>、バリウムは「勇気を与える」ドラッグとして子ども兵に与えられていたという<sup>11)</sup>。

ヘロインや大量のコカインはしばしば明確な耐性を形成し<sup>12)</sup>、同じ効果を得るために摂取量を増やしていく必要が生じる。さらに、ヘロインのような身体依存性を伴うドラッグは、離脱

時に激しい苦痛を引き起こす。その苦痛を避けるためにドラッグを再使用し、それを繰り返すうちに、耐性ゆえに摂取量がますます増加していくという悪循環に陥ってしまう。これがドラッグ依存の薬理的メカニズムである。

## （２）ドラッグの統制と治療の現状

ドラッグユーザーを犯罪者として厳しく処罰するのか、あるいは患者として治療を受けさせた上で社会復帰へと導くのか。ドラッグユーザーに対する措置には唯一の正しい解はなく、国によってその対応はかなり異なっている。

違法行為としてドラッグ使用を扱う場合の国際基準として、1988年に国連で採択された「麻薬及び向精神薬の不正取引の防止に関する国際連合条約」がある。同条約は、1961年の「麻薬に関する単一条約」と1971年の「向精神薬に関する条約」を徹底するための法的な枠組みについて規定しており、麻薬又は向精神薬を個人的な使用のために故意に所持し、購入し、又は栽培することを犯罪としており、締約国に必要な措置をとることを求めている。リベリアは2005年、「麻薬及び向精神薬の不正取引の防止に関する国際連合条約」に署名しており、ドラッグの不正取引を取締まる機関として麻薬取締局（Drug Enforcement Agency：DEA）を2006年に本格始動させた<sup>13)</sup>。しかしながら、DEAはリベリアの15州全体を管轄しているものの、財源不足のために地方の事務所には適切な交通手段もなく、活動はかなり制約されているという<sup>14)</sup>。さらに現状では、国内にはドラッグ使用や取引を罰する厳しい法律がなく、たとえドラッグディーラーやドラッグユーザーが逮捕されても、20米ドルほどのわずかな保釈金さえ支払えば釈放されてしまう<sup>15)</sup>。

モンロビア中心部にあるセンターストリート（Center Street）は、住民の約60%がドラッグユーザーともいわれ、ゲッターが密集している地域である<sup>16)</sup>。そのセンターストリートには2か所の交番があり、警察は定期的にドラッグのディーラーやユーザーの摘発を行っている。しかし、ゲッターへの強制捜査の情報が事前に警察関係者から洩らされたり、警察が賄賂を受け取ってディーラーを見逃したりするといった、ドラッグにまつわる一部の警察官の不正についてもインタビュー調査を通して仄聞した。元警察官のあるドラッグユーザーによると、現役警察官のなかには上層部のドラッグディーラーとつながりを持ち、自らゲッターを経営している者もいるとのことであった。また警察のゲッターへの強制捜査は、警察の単なるパフォーマンスであり、実態はディーラーやドラッグユーザーから賄賂をとる機会にすぎないという意見もあった<sup>17)</sup>。

他方、医療面において、世界保健機関（World Health Organization：WHO）が定めた疾病の国際基準によると、ドラッグへの依存は精神障害とされる。幻覚、妄想、意識障害といった明らかな精神症状がなくとも、ドラッグを摂取したいという強い欲望が自己の行動をコントロールする場合、「ドラッグによる自己コントロールの喪失」という精神障害が成立する。しかしリベリアにおいては、精神障害のための医療サービスが極めて乏しい。たとえば、人口およそ360万人のリベリアには精神科医が1人しかおらず、精神科病院もモンロビアに1か所しかない。しかも同病院は有料であるため、低階層のドラッグユーザーにとってアクセス可能な

資源とはなっていない。

筆者がインタビューしたドラッグユーザーたちは、「ドラッグをやめたいけど、やめられない」と口をそろえて語っていた。しかし、現在のリベリアでは、ドラッグユーザーに対して適切な医療サービスはほとんど提供されておらず、ドラッグの不正取引や使用を統制するためのシステムも機能していない状況である。

### 3. インタビュー調査

#### (1) インタビュー調査の方法と内容

2010年8月下旬から9月中旬にかけて、筆者はモンロビア市内にある2つのドラッグコミュニティ——ロッキングタウン（Logan Town）と前述のセンターストリート——において、56人（男性41人、女性15人）のドラッグユーザーに対してインタビュー調査を実施した。

調査では、インフォーマントの基本属性、ドラッグとの出会い、ドラッグ使用の現状と変化、地域生活の現状と将来の希望、という4つの領域の質問群を含む調査票を用いつつ、インフォーマントの回答に応じて、その内容を深めて質問していく半構造化面接の方法を採用した。インタビューには筆者ともう1人の日本人の調査者に加え、リベリア人の通訳1名が加わり、通訳がローカル言語から英語への通訳およびインフォーマントからの情報に対する補助説明をしてくれた。また、日本人の一方の調査者が主に質問をし、もう一方の調査者がインフォーマントから発せられる言語的・非言語的な情報を観察記録する方法をとった。さらにインタビュー直後に、リベリア人通訳者とのフィードバックを行い、インタビュー内容の確認を行った。インタビューは、インフォーマントの許可のもと、ICレコーダーに録音した。

インフォーマントに対して、インタビューの趣旨、匿名性、プライバシーの保護などについて説明した上で、データは研究以外の目的で利用しないこと、本人が答えたくない質問には答えずに「いいえ」と伝えることを伝え、調査協力への同意を文書にて得た。

#### (2) インフォーマントの基本属性

インフォーマントの総数は、56人（男性41人、女性15人）である。年齢層は、21～30歳が27人（男性20人、女性7人）と最も多く、続いて31～40歳の16人（男性12人、女性4人）であった。さらに41～50歳が5人（男性5人）、20歳以下が4人（男性1人、女性3人）、51歳以上が2人（男性2人）で、年齢不明の者が2人いた。平均年齢は31歳、最高年齢が52歳、最小年齢は16歳であった（図1）。

図2は、インフォーマントの教育レベルを示している。最も多かったのは、小学校中退で全体の41%（23人）を占める。次に、小学校卒業が23%（13人）、全く学校に行かなかった者が16%（9人）であった。ちなみに大学を卒業した者はいなかった。

56人のうち兵士の経験をもつ者が34人で、そのうち7人が女性であった。また紛争中にドラッグを始めた者が全体の73.2%（41人）、紛争後に始めた者が17.9%（10人）、紛争前に始めた者が8.9%（5人）であり、紛争中にドラッグを始めた41人のうち11人が兵士の経験を持っていなかった。

図1 年齢

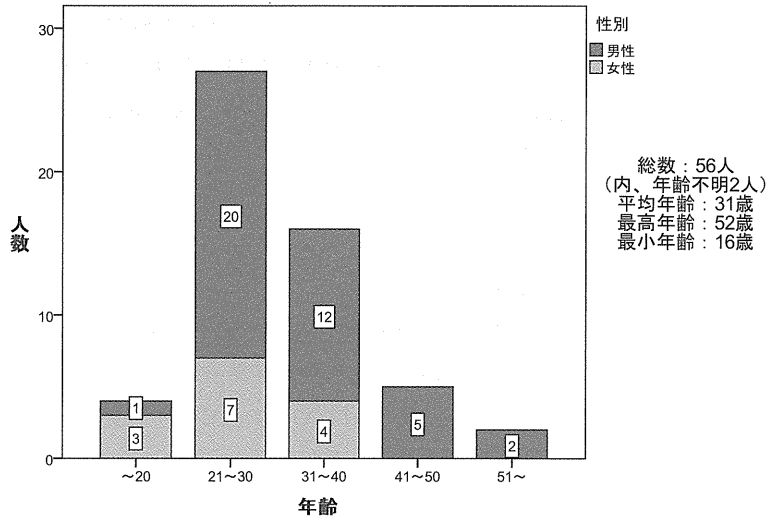


図2 教育

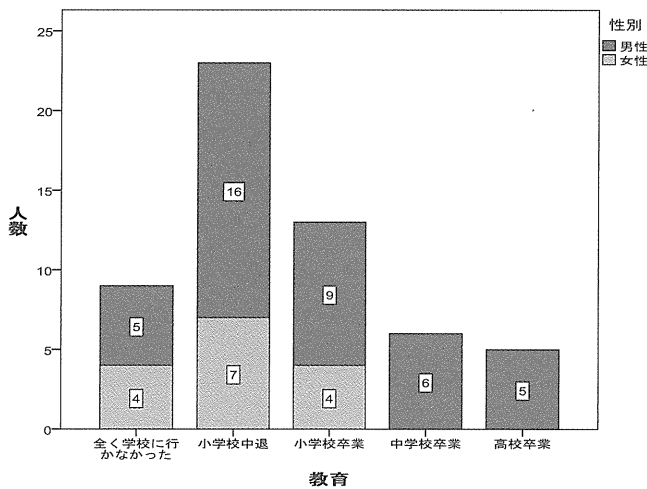


表1は、インフォーマントの性別と職業のクロス表である。無職と答えた者は1名で、大工の夫に経済的に頼っているとのことであった。定期的な仕事をしている者が7人(12.5%)で、その内容は、水売り、洗車、大工などであった。日雇いで働いている者は32人(57.1%)で、鉄くず収集、洗車、掃除、セメント運び、なかには、ドラッグディーラーのもとでドラッグの売人をしている者もいた。仕事の内容としては、定期的な仕事と日雇いと顕著な相違はあまり見られず、むしろ自分の仕事が安定したものなのか、そうではないのかは、本人の主観的な判断によるものであった。女性のインフォーマントについては、73.3%が売春で生計を立てていた。彼女たちによると、売春は通常1回50~150リベリアドル(60~180円)程度で行われ、1日平均5~6人の客をとるという。客の多くはゲッター付近に群がるドラッグユーザーたちである。ちなみに50リベリアドル(60円)というのは、現地の缶コーラ1本程度の値段である。

表1 性別と職業のクロス表

			無職	仕事あり				合計
				定期的な 仕事	日雇い	その他		
						売春	盗み	
性別	男性	度数（人数）	0	7	29	0	5	41
		性別の％	0.0%	17.1%	70.7%	0.0%	12.2%	100.0%
	女性	度数（人数）	1	0	3	11	0	15
		性別の％	6.7%	0.0%	20.0%	73.3%	0.0%	100.0%
合計		度数（人数）	1	7	32	11	5	56
		性別の％	1.8%	12.5%	57.1%	19.6%	8.9%	100.0%

その他、5人の男性が盗みで生計を立てていると答えた。彼らによると、金目のものは何でも盗み、とくに携帯電話などは高額で買い取ってもらえるとのことである。

失業率が85%<sup>18)</sup>ともいわれているリベリアでは、安定した一定の収入をえることは極めて困難である。ましてや、ストリートで暮らすドラッグユーザーたちにとっては、生きていくためには手段を選ばず、ありとあらゆる仕事をせざるえない現状がうかがえる。

### （3）元子ども兵のジョン（仮名）の事例

ジョン（30歳、男性）は、元子ども兵である。派手な迷彩柄の帽子をかぶり、真っ赤なTシャツの上にチェックのキルティングのベストを着ている姿は、インフォーマントのなかでもひときわ存在感を放っていた。

戦闘で両親が殺されたジョンは、行くところもなく、12歳で子ども兵となる。バブル（バリウム）を始めたのはその頃である。司令官が、「勇気を出すために、スタミナをつけろ」とバブルをくれた。当時、コカインやヘロインはしなかったが、バブルは戦闘のために定期的に支給されたので使い続けた。バブルを使うと、元気がでて勇敢になれた。「（紛争中は）司令官が撃った流れ弾が当たったこともあるよ。今でもここ（と頬のあたりを指す）のところに弾が入っていて、ときどき頭がガンガンする。怪我してもなんにも補償されなかったよ。革命だからね」と当時の様子を話す。

妻とは2003年（紛争中）に出会う。その頃、司令官となっていたジョンが、彼女に食材を分けてやり、親しくなった。彼女には別の男性との娘が1人いたが、その子も引き取って、一緒に暮らし始める。その後、ジョンとの間にも娘ができ4人家族となるが、住んでいた家が波で壊され、それ以来、妻と子どもは妻の母親と暮らし、ジョンはストリートで暮らしている。〈仕事は？〉と聞くと「犯罪行為」とあっさりと言う。〈どんな物を盗んでいるの？〉という質問に対しては、「昨日は、携帯電話を2台盗んで、15米ドルと20米ドルで売ったよ」と説明してくれる。盗品はビジネスパートナーに買い取ってもらい、儲けは（盗みをしている）仲間と山分けしているとのことだった。

現在は、ヘロイン、コカインを吸い、1日に1500リベリアドルから2000リベリアドルをド

ラッグに使っている。「ドゥジー（ヘロイン）を吸うと、身体がだるくなって何もできなくなる。ココ（コカイン）はあまり効果を感じない」と言う。妻もジョンがドラッグをすることは知っている。ドラッグで逮捕されたことはないが、窃盗では何度も逮捕された経験をもつ。去年は、中央刑務所に1週間投獄されたが、妻が3000リベリアドルの保釈金を支払ったので、釈放された。〈盗みはやめられないの？〉と聞くと、「家族を養わないといけないから」ときっぱりと答える。しかしドラッグはやめたいと言う。

「ドラッグは何度もやめようとしたよ。ドラッグのせいで気が狂った奴も見てきたしね。でも関節が痛くなってやめられなかった。ドラッグを吸うことは、もう自分の一部になってしまっているからね。でも家族の面倒をみるためにいつかはやめたいとは思っているよ」

〈やめてどうするの？〉と聞くと、真面目な顔で「ドラッグディーラーになりたいね」と言う。

#### （4）売春で生計をたてるマリア（仮名）の事例

22歳のマリア（女性）は、かなり小柄で童顔である。頭にスカーフを巻き、耳にはピアスをしている。緊張しているのか、小さな声でぼそぼそと話す。

マリアは、8歳か9歳のころに、友だちの影響でマリファナを始める。マリファナを吸うと食欲が出て、沢山食べられたから吸い続けたと言う。学校には全く行っていない。

紛争中、隣国のコートジボアールに逃げ、難民キャンプで過ごしている。しかし現地の母国語であるフランス語は全く話せない。コートジボアールにいる頃（7年前）、ドゥジー（ヘロイン）を始める。足が腫れて痛くて毎日泣いていたところ、友人が「痛みが治る」とドゥジーを勧めてくれ、それ以来、続けている。

5年前にリベリアに帰国し、モンロビアのゲットーで暮らし始める。現在は、売春婦として1日に客を5～6人とり、600～700リベリアドル（720～840円）を稼いでいる。使用ドラッグはドゥジーとグラス（マリファナ）で、1日に4～5回、お金が続く限り吸う。〈ドラッグをしていて、警察に捕まったことはある？〉と聞くと、「何度も捕まったわ。そのたびに警察官に殴られて…。ゲットーでただ座ってただけで殴られて逮捕されたこともあるのよ。そのときは、イギリスのNGOが弁護士を送って助けてくれたけど」と訴える。〈ドラッグをやめたいと思う？〉という質問に対しては、「ドラッグをやめたいけど、やめたら身体中が痛くなるから、治療を受けない限りは無理よ。ドラッグをやっている、いいことなんか何もない。ボーイフレンドが死んじゃったの。私が彼にドラッグを紹介して、病気になって死んだわ。ママはロファ州（リベリアの州）にいるけど、帰るお金がないから、帰れないし」と答える。その一方、刑務所に3か月間いたときは、全くドラッグをしていなかったと言う。しかし釈放されて行くところがなく、もとのドラッグコミュニティに戻ってきてしまい、またドラッグを吸い始めてしまう。

マリアは、朝は5時に起きて、特にすることもなく、ただ座ってドラッグ仲間が来るのを待つ。お金があれば食べるが、なければ食べない。お金ができて、食べるよりもドゥジーを吸う。



#### 4. まとめにかえて

リベリア都市部のドラッグ使用の現状をドラッグユーザーの基本属性や事例をふまえて見ていくと、彼らがドラッグをやめたくてもやめられない理由は、彼ら個人にあるというよりもむしろ彼らを取り巻くリベリア社会の構造に大きな原因があると指摘できよう。ドラッグユーザーたちが、失業率85%ともいわれる社会のなかで、スティグマを背負いつつ、まともな仕事や住処を見つけることは至難の業である。リベリア都市部では、ドラッグは容易に入手でき、またそれを統制する力は極めて脆弱である。このような状況下で、一旦ドラッグの依存に陥ってしまうと、医療サービスへのアクセスをもたない彼らが、自力でそこから抜け出すことはかなり難しい。

そうしたなか、彼らは生活を維持する上でのニーズを、ドラッグを通して充足させていた。ドラッグを使用することによって、離脱症状による痛みや苦しみを回避し、仲間と集い、コミュニティを形成し、自分の居場所を確保している。また、そこには相互支援の関係も見られた。しばしば「慢性自殺行為」と喩えられるドラッグ使用ではあるが、筆者がインタビューしたユーザーたちは、むしろ一日一日をなんとか生き抜くためにドラッグを使用しているかのよう読み取れた。たとえそれが彼らなりの刹那的な「処世術」であったとしても、彼らにとって他の現実的な選択肢は存在しない。それこそが、紛争後のリベリア都市部におけるドラッグユーザーを取り巻く厳しい現実なのである。

#### 注

- 1) Office of the Special Representative of the Secretary-General(n.d.) *At Working Together: United Nations in Liberia*, p. 7.
- 2) Amnesty International (2004) *Liberia: Fulfilling the promises of peace for 21,000 child soldiers*, AI Index: AFR 34/006/2004, p. 2.
- 3) Johnson, Kirsten, Jana Asher, Stephanie Rosborough, et al. (2008) "Association of Combatant Status and Sexual Violence with Health and Mental Health Outcome in Post-conflict Liberia", *The Journal of the American Medical Association*, 300(6), pp. 676-690.
- 4) 山根達郎 (2008) 「DDR とリベリア内戦」 武内進一編『紛争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』 アジア経済研究所, p. 165.
- 5) ドラッグ使用に際して、「乱用」「依存」「中毒」という概念が一般的に用いられる。「乱用」とは社会的規範（ルール）から逸脱した方法や目的でドラッグを摂取することを意味する。しかし社会的規範という概念は、法的、道徳的、倫理的価値を包摂するため、リベリア社会において照合した場合、曖昧さを伴う。また「依存」「中毒」の概念には、ドラッグ摂取の状況にある一定のレベルであるという診断的判断を要する。そこで本論文では、対象者に対して、ドラッグ乱用者、ドラッグ依存症者、ドラッグ中毒者という呼称ではなく、ドラッグユーザーという呼称を用いる。
- 6) Harris, Benjamin L. (2008) *Substance Abuse Mapping*, WHO.
- 7) 現地のインタビュー調査 (2010年9月) より。
- 8) UNODC (2011) *World Drug Report*, UNODC, p. 15.
- 9) The Free Library (2011) *The Country reports: Liberia*, <http://www.thefreelibrary.com/Country+reports%3A+Liberia.-a0259155729> (2012年2月21日アクセス)
- 10) 現地でのインタビュー調査 (2010年9月) より。

- 11) Human Rights Watch, *How to Fight, How to Kill: Child Soldiers in Liberia*,  
<http://www.unhcr.org/refworld/docid/402d1e8a4.html> (2012年 2 月21日 アクセス)
- 12) Emmelkamp, Paul M.G. and Eellen Vedel, (2006) *Evidence-Based Treatment for Alcohol and Drug Abuse: Practitioner's Guide to Theory, Method, and Practice*, Routledge (=2010、小林桜児・松本俊彦訳『アルコール・薬物依存臨床ガイドーエビデンスにもとづく理論と治療』、金剛出版、p. 14.)
- 13) DEA の副局長とのインタビュー (2009年 8 月) より。
- 14) 同上
- 15) SomaliPress.com (2011) *Liberia a Long Way From Winning War on Drug*,  
<http://www.somalipress.com/news/2011-jan-07/liberia-long-way-winning-war-drugs.html> (2012年 2 月22日 アクセス)
- 16) *Daily Observer*, Vol. 14, No. 283, September 6, 2010, “60% Center Street Residents are Drug Users”
- 17) 現地の聞き取り (2010年 9 月) より。
- 18) Index Mundi, Country Fact,  
[http://www.indexmundi.com/liberia/unemployment\\_rate.html](http://www.indexmundi.com/liberia/unemployment_rate.html) (2012年 2 月22日 アクセス)

(原稿受理日 2012年 2 月27日)